

音楽青年の上京・進学

—小林秀三と下総覚三（皖一）の東京音楽学校受験をめぐる考察—

坂本 麻実子¹

Young Music Lover's Ambition to Study in Tokyo

— KOBAYASHI Hidezo, SHIMOFUSA Kakuzo(Kan-ichi), and Their Entrance Examination for Tokyo Academy of Music—

SAKAMOTO Mamiko

キーワード：東京音楽学校，音楽教員，小林秀三，『田舎教師』，下総覚三（皖一）

Keywords：Tokyo Academy of Music, Music Teacher, KOBAYASHI Hidezo, *Inaka-Kyoshi*, SHIMOFUSA Kakuzo (Kan-ichi)

1. 東京音楽学校甲種師範科

近代日本において，立身出世とそのための上京・進学は地方在住の多くの青年たちが抱いた大望であり（竹内 2005），東京の名門校には全国から受験生がやってきた。音楽で身を立てたい者たちは受験先の一つに東京音楽学校の甲種師範科を選んだ。甲種師範科は明治 32 年（1899）に創設された音楽教員養成学科である。旧制下では，中等教育の音楽科の教員養成は他の教科の教員とは異なり高等師範学校・女子高等師範学校では行われず，音楽専門学校である東京音楽学校の一学科のみで行われたので，入試は激戦であった。もっとも東京音楽学校の方は「音楽ノ教授及攻究ヲナシ兼テ音楽教員ヲ養成スル所」（学則第一條。下線は筆者）なので，学校の本体である「本科（3 年制）」では演奏家を養成し，本科への準備過程として予科（1 年制），本科の上には研究科（2 年制）を置いた。そして本科とは別に「師範科（甲種・乙種）」を立て，甲種師範科（3 年制）では師範学校，中学校，高等女学校の音楽教員，乙種師範科（1 年制）では小学校の唱歌の専科教員を養成した（以下，甲師，乙師と略す）。本科や乙師と比べると，甲師は本科ほどの演奏力を求めず，乙師よりは専門的な音楽教育を行い，希望者には学資支援として官費を支給した。甲師は音楽の教員免許と

免許取得に必要な専門教育がセットになっているので，受験生の狙い目になっていた。

そこで埼玉県から上京した小林秀三（1884-1904）と下総覚三（1898-1967）という二人の甲師受験生を取り上げたい（表 1 と 2 の年譜参照）。小林秀三は田山花袋が明治 42 年（1909）に発表した小説『田舎教師』の主人公，林清三のモデルである。明治 17 年（1884）生まれの小林は埼玉県第二尋常中学校（のち熊谷中学校と改称，現埼玉県立熊谷高等学校）を卒業したが貧しさから進学できず，小学校教員をしながら音楽を独学した。明治 36 年（1903）に甲師を受験したが不合格になって地元に戻り，翌年に肺結核により死亡した。一方，下総覚三は今日では本名の覚三より皖一の名で通っており「たなばたさま」（笹の葉さらさら 軒端にゆれる）の作曲家であるが，実は甲師卒業生である。明治 31 年（1898）生まれの下総は大正 6 年（1907）に埼玉県師範学校（現埼玉大学教育学部）を卒業して甲師に合格し，音楽教員になって地方校に赴任した。しかし 6 年間勤務して退職し，作曲家を志して二度目の上京・進学を決意する。実際，昭和 7 年（1932）にドイツ留学を果たし，昭和 9 年（1934）の帰国後は母校の本科作曲部に迎えられ，昭和 17 年（1942）には教授に昇任し，昭和 31（1956）年には音楽学部長にも就任し，昭和 37 年（1962）まで在職した。そのため下総は昭和 27 年（1952）の東京音楽学校の閉校と甲師の終焉に立ち会った⁽¹⁾。なお，乙師は昭和 2 年（1927）

¹ 富山大学人間発達科学部

表 1. 小林秀三年譜

西暦 (暦年)	満年齢	事 項
明治 17 年 (1884)	0 歳	3 月栃木県足利郡小俣村 (現足利市) に生まれる。
明治 26 年 (1893)	9 歳	3 月足利尋常小学校卒業 6 月に埼玉県大里郡熊谷町 (現熊谷市) に転居する。 6 月大里高等小学校に入学
明治 29 年 (1896)	12 歳	3 月大里高等小学校第 3 学年終了 4 月埼玉県第二尋常中学校 (現埼玉県立熊谷高等学校) 入学
明治 33 年 (1900)	16 歳	冬、忍町 (現行田市) に転居
明治 34 年 (1901)	17 歳	3/28 埼玉県第二尋常中学校卒業 4/11 弥勒高等小学校に代用教員として採用 5/16 小学校准教員免許取得
明治 36 年 (1903)	19 歳	3 月東京音楽学校甲種師範科を受験し不合格
明治 37 年 (1904)	20 歳	9/21 死亡

表 2. 下総覚三 (皖一) 年譜

暦年 (西暦)	満年齢	事 項
明治 31 年 (1898)	0 歳	3/31 埼玉県北埼玉郡原道村 (現加須市) で生まれる。
明治 43 年 (1910)	12 歳	3 月原道尋常小学校卒業
明治 45 年 (1912)	14 歳	3 月栗橋高等小学校卒業 4 月埼玉県師範学校師範学科第一部入学
大正 6 年 (1917)	19 歳	3 月埼玉県師範学校師範学科第一部卒業 4 月幸手尋常小学校訓導となるも休職、東京音楽学校甲種師範科入学
大正 8 年 (1919)	21 歳	2/15、7/25 学友会土曜演奏会でオルガン演奏、この年『音楽』10 巻 2、3、6、11 号に短歌発表。白桃と号す。
大正 9 年 (1920)	22 歳	3 月甲種師範科主席卒業、音楽と国語の 2 枚免許取得。 長岡女子師範学校教諭兼訓導となる。
大正 10 年 (1921)	23 歳	1 月飯尾千代子 (大正 9 年東京音楽学校乙種師範科卒) と結婚 6 月秋田県師範学校教諭兼訓導、秋田県高等女学校嘱託
大正 11 年 (1922)	24 歳	3 月岩手県師範学校教諭兼訓導
大正 13 年 (1924)	26 歳	8 月栃木県師範学校教諭兼訓導、週末は作曲のレッスンのため東京の信時潔宅へ通う。この年、覚三は皖一、千代子は伸江と改名する。
昭和 2 年 (1927)	29 歳	3 月栃木県師範学校退職、上京。東京の複数の小中学校で唱歌・音楽を教え始める。
昭和 7 年 (1932)	34 歳	3/21 文部省在外研究員として作曲法研究のためドイツ留学。 ベルリン高等音楽学校でヒンデミットに師事。
昭和 9 年 (1934)	36 歳	9/3 帰国、同月東京音楽学校教務嘱託、11 月講師嘱託、 12 月助教授
昭和 17 年 (1942)	44 歳	3 月教授昇任
昭和 31 年 (1956)	58 歳	10 月東京芸術大学音楽学部長就任 (~1959.6.1)
昭和 37 年 (1962)	64 歳	7/8 死亡

に生徒募集を停止して事実上の廃止となっており (坂本 2008)、東京音楽学校から昇格した東京芸術大学音楽学部は音楽教員養成学科を設置せずに現在に至っている。

小林や下総のような明治生まれの地方青年にとって、身近な音楽家と言えば教員であった。小学校教員を目指すなら、下総のように道府県ごとに設置されている師範学校の本科第一部 (4 年制) に進学すればよい。小林のような中学校卒業生には師範学校

の本科第二部 (2 年制) もあった。しかし、教科目の一つとして唱歌を教える小学校教員と中等学校の音楽教員は専門性では段違いであった。小林も下総も音楽教員になりたくて上京し甲師を受験した。その結果、小林は不合格で小学校教員のまま終わった。一方、下総は合格して音楽教員になったが今度は作曲家になりたくて退職し、二度目の上京・進学に打って出た。下総は音楽教員よりも作曲家として音楽界に名を残す選択をしたのである。もちろん、多くの

甲師卒業生は小林とは異なり入試を突破する実力をもち、また下総とも異なり地方校で音楽教員人生を終えたのであるが、筆者は小林と下総の東京音楽学校受験を比較・考察し、音楽教員を志して挫折した者と音楽教員を志しても離職を決断するに至った者を通して近代日本の音楽史・音楽教育史の隠れた一面を掘り起こしてみたい。

2. 小林秀三の東京音楽学校受験

田山花袋は小林秀三の日記（以下『秀三日記』と呼ぶ）を題材にして『田舎教師』を書いた。筆者は『秀三日記』の音楽記事をごく普通の地方青年の音楽記録として考察しているが（坂本 2006）、今回は秀三の進学・就職問題に焦点をあてて再考する。

小林は明治 17 年（1884）3 月 15 日に栃木県足利郡小俣村（現足利市）に生まれた。明治 26 年（1893）、9 歳のときに父親の商売がうまくいかなくなり、小林家は故郷を捨て埼玉県大里郡熊谷町（現熊谷市）に出てきた。小林は大里高等小学校に入学し、明治 26 年の席次は 136 人中 55 番で「唱歌」の成績は 10 点中 9 点であった（小林 1969：132-133）。明治 29 年（1896）に大里高小を 3 年で退学し、埼玉県第二尋常中学校に入学した（2 回生）。明治 33 年（1900）の冬、小林家はますます困窮し、夜逃げ同然に忍町（現行田市）に移った。

現存する『秀三日記』は明治 34 年（1901）1 月 1 日から始まる（明治 34 年の一年分は小林 1969 に収録）。以下、『秀三日記』の日付を（）内に記す。中学 5 年生の小林は卒業を目前にして進路に悩んでいた。二中は埼玉県のエリート校であり、学友の大半は進学を目指す。小林も進学希望であり専門学校の規則書を取り寄せてはいた（1/28）。しかし、前年 7 月から授業料を滞納しており（1/25）、病弱で欠席も多く、卒業試験では得意の国語は満点だったが全科目の平均は 71 点であり、席次は 45 人中 36 番（落第 2 人）であった（3/26）。（なお二中では唱歌は実施されていない。）その結果、小林は進学をあきらめ『田舎教師』第 1 章を引用すれば「遊んでいても仕方がないから、当分小学校にでも出た方が好いという話になった」（田山 1986：8）。ちなみに秀三の親友の席次と進学先を見ると、新島百介（『田舎教師』の小畑）は 5 番で東京高等師範学校（現つくば大学）博物科、小島周一（『田舎教師』の小島）は 8 番で第

四高等学校（現金沢大学）→東京帝国大学（現東京大学）、狩野益三（『田舎教師』の加藤郁治）は 9 番で東京高等師範学校英語科、吉沢五郎（『田舎教師』には取り上げられなかった）は 30 番で東京法学院（現中央大学）であった（小林：137-139）。一方、小林は挫折感を引きずりながら教員検定試験のための勉強を始めた（3/22）。しかし、卒業式（3/28）を過ぎても勤め口が見つからない。小林は近場の熊谷や行田の高等小学校を探したが、大里高小は採用がなく（3/27）、小林と狩野に話が来た忍高小の口は狩野に譲ってしまった⁽²⁾（4/12）。狩野の父親は郡視学であり、小林に早急に無試験検定の願書を出すように注意し、「ミロク」（『秀三日記』4/15 の表記による）高小の口をもってきた。しかし小林は「ミロク」はどこにあるのか見当がつかず、むしろ川越町（現川越市）に欠員ありという話の方に心が動いた（4/15）。菖蒲町（現久喜市）の口は話を聞いてみると希望する高等小学校ではなく、下級の尋常小学校だった（4/16）。狩野の父親から再度「みろく」（『秀三日記』4/17 の表記による）を勧められ、やむなく履歴書を出す（4/17）。その「弥勒」（『秀三日記』4/23 の表記による）は採用なしと聞いたときにはそれほど落胆せず、むしろ本庄町（現本庄市）の口に期待した（4/23）。ところが翌日、突然に弥勒高小の代用教員に採用が決まって辞令も下り、小林はようやく無試験検定の願書を出す（4/24）。翌日、小林は『田舎教師』第 1 章に「四里の道は長かった」（田山 1986：5）と描写されたように、行田から羽生町（現羽生市）へ、羽生町から三田ヶ谷村（現羽生市内）へと田舎道を歩いて弥勒高小へと向かった。ところが校長は秀三の採用について連絡を受けておらず、秀三は暗澹たる気持ちになった（4/25）。前任者が去るのを待ち、やっと小林の教員生活が始まった（4/29）。5 月になり、小林は検定試験受験のため汽車で浦和町（現さいたま市）に向かい（5/6）、小学校准教員免許を取得した（5/16）。週末は教員講習会に参加し（5/3, 5/26）、教案も書き始めた（6/3）。赴任以来、学校の宿直室に寝泊まりしていたが、羽生の建福寺に下宿を決めた（5/30）。建福寺住職の太田玉茗は作家でもあり田山花袋の義弟にあたる。小林は玉茗に専門学校志望だと打ち明け（7/11）、「早稲田講義録」をとると語った（9/24）。この時点では秀三は文学科のある早稲田専門学校（現早稲田大学）への進学を希望していたと推測される。羽生の小学校から口が

かかっても(9/19)、小林は狩野の父親と相談して断った(9/21)。

ところで夏休み明けの弥勒高小に新しいオルガンが到着し、小林は教師の特権でさっそくオルガンを鳴らした(9/1)。このオルガンによって小林の関心は文学から音楽へ移っていく。小林は手持ちの文芸書や雑誌から楽譜を見つけ出して弾いた。島崎藤村の詩集『落梅集』(明治34年刊)に収録された「海辺の曲」(シューベルト作曲のリート「浜辺にて」のメロディに藤村が歌詞をつけた)は簡単ではなかった(9/30, 10/2)。新島がいる東京高等師範学校の寄宿舎に「海辺の曲」の楽譜を送ると(10/14)、新島は「六段」の楽譜を送ってきた(10/19)。『明星』の最新号(16号)を読み(10/18)、掲載されていた「残照」(与謝野鉄幹作詞、吉村吉門作曲)を弾いてみると「海辺の曲」よりは簡単に歌いやすくもあり、「海辺の歌」より気に入った(10/19)。以来、小林は熱心に楽譜を集め、写譜した。日曜日は朝から夜11時まで写譜し、唱歌、琴曲、進行曲(マーチ)、その他の歌曲を全部で40曲あまり集めた(11/20)。次の日曜日は大里高小へ行き、裁縫室に泊まって写譜した(10/27)。平日も図画の採点を終えてから写譜した(10/30)。生徒からも『少年世界』を借りて唱歌を写譜し(11/13)、土曜日は早々に帰宅して知人から借りた楽譜10曲あまり写譜し、日曜日も引き続き10曲あまり写譜してから返した(11/16, 17)。

明治35年の『秀三日記』は未発見であるが、『田舎教師』第33章では林清三を次のように描写している。

「音楽はやはり熱心に遣っていた。譜を集めたものが大分溜まった。

授業中唱歌の課目がかれに取って一番面白い楽しい時間で、新しい歌に譜を合わせたものを生徒に歌わせて、自分はさも一廉の音楽家であるかのようにオルガンの前に立って拍子を取った。一人で室にいる時も口癖に唱歌の譜が出た。」(田山 1986: 163, 下線は筆者)

「新しい歌に譜を合わせたもの」とあるので、小林は詩を書き、その詩に節付けするようになった。もともと小林は詩歌が趣味だったが、写譜の作業を通じて作詞、作曲のノウハウを身につけ、学校のオルガンをほぼ独占的に使用し歌曲を作るまでになった。しかし独学には問題もある。小林は歌を作っては生徒に歌わせて音楽家気分になり、適切な指導も

受けないまま音楽教員への夢だけ膨らませていくのである。

『田舎教師』第35章によれば、明治35年の暮れに清三は東京音楽学校受験を母親に伝えた。清三は「中学の教員の免状位は取りたい」、「音楽の方をこの頃少し遣っているから、来年あたり試験を受けて見ようと思っているんです」、「音楽学校には官費がある」、「三年位どうにでもしてもらわなくちゃ」(田山 1968: 169-170)と言っているのです、志望学科は甲師である。

明治36年の『秀三日記』も未発見であるが、弥勒高小で小林の同僚であった速水(旧姓関根)義憲(『田舎教師』の関さん)は小林の受験は事実だと証言している(小林 1969: 232-233)。

明治37年の『秀三日記』で現存するのは4月から6月にかけての一部である(岩永 1956, 全国国語国文学会 1960に収録)。小林は「運動会の歌」を作り(5/9, 10)、日露戦争の戦況に合わせて「旅順港閉塞作戦の歌」(5/12, 13)やロシア軍に撃沈された特務船「金州丸の歌」(5/16)を作っていた。甲師受験に失敗しても、歌を作っては生徒たちに歌わせる生活は変わらなかった。

3. 下総覚三の東京音楽学校受験

下総はエッセイ集『歌ごよみ』(下総 1954)を残しており、その中で「音楽の勉強を始めたのが十七八の頃、音楽学校へはいったのが二十の春、そこで漸く正式な勉強がはじまったというもののだが、又二十三で音楽学校を卒業して五年経った二十七の秋から先生について作曲の勉強をはじめたので、ドイツへ行ったのは三十五の年、何でもかでも遅まき」(下総 1954: 71)と述べている。下総は本当に「遅まき」なのか。まずは最初の上京・進学である甲師入学までを検討しよう。

下総は明治32年(1898)3月31日、埼玉県北埼玉郡原道村(現加須市)で生まれた。地元の原道尋常小学校を卒業し(入学時は4年制であったが小学校改正により6年制に延長された)、栗橋町(現久喜市)まで一里半の道を歩いて父親が校長をつとめる栗橋高等小学校(2年制)に通った。下総は栗橋高小で唱歌の得意な教員に出会い音楽に目覚めた。父親が校長ということで小使い室に泊まらせてもらい、真夜中に教員室のオルガンを鳴らすこともあった

表3. 埼玉県師範学校本科一部における「音楽」の週時間数と程度（明治44年度より改正実施）

学年	週時間数	程 度
1 学年	2	楽典、基本練習、軍歌、唱歌
2 学年	2	楽典、基本練習、軍歌、唱歌、楽器使用法
3 学年	2	楽典、基本練習、単音唱歌、複音唱歌、楽器使用法、教授法
4 学年	2	単音唱歌、複音唱歌、楽器使用法

（下総 1954 : 61）。明治 45 年（1912）に栗橋高小を卒業し、浦和町にある埼玉県師範学校師範学科第一部に入学して寄宿舎に入った。

表 3 に示すように、埼玉県師範学校では 4 年間を通じて週 2 時間の唱歌の授業がある。楽典と基本練習の上に、1 年次は唱歌、軍歌、2 年次は唱歌、軍歌、楽器使用法、3 年次は単音唱歌、複音唱歌、楽器使用法、教授法、4 年次は単音唱歌、複音唱歌、楽器使用法を課す。在学中の唱歌担当教員は成沢潤蔵（明治 41 年東京音楽学校本科器楽部卒）であった（百年史編集委員会 1976 : 207, 427）。下総の回想では、1, 2 年のうちはオルガンを少しいじるだけでも上級生に怒られるので、帰省したときに栗橋高小へ行ってオルガンを弾いた。3 年になると熱心にオルガンを練習し、「右の手と左の手と違う動きをする」（10 本の指を自由自在に動かして弾く）奏法や「片手だけで二つの音や三つの音を同時に出す」（重音、和音）奏法をマスターした。4 年になると師範学校でも貴重品扱いだったピアノの使用を許可された。それでも栗橋高小時代に真夜中にオルガンを鳴らした喜びに勝るものはなかったという（下総 1954 : 61-62）。前出の『歌ごよみ』の記述と照合すると、下総が「音楽の勉強を始めた」のはオルガンやピアノを学んだ師範学校 3, 4 年生の頃と推測される。ちなみに、師範学校時代の下総の唱歌の成績はずっと最上の「甲」であった（中島 2018 : 12）。

さて、埼玉県師範学校の卒業生はほとんどが県下の小学校教員になったが（百年史編集委員会 1976 : 221）、下総は平教員から校長まで上りつめた父親のような人生を望まず、甲師進学を選んだ。下総は東京音楽学校卒の音楽教員から 4 年間の指導を受けているので、音楽を独学した小林に比べれば受験は有利であったろう。なお、埼玉県師範学校から甲師に進学したのは松園卿美（明治 34 年師範学科卒、同 37 年甲師卒）以来、下総が二人目である（埼玉県師範学校 1917 参照）。大正 6 年（1917）3 月 31 日付けで幸手町（現幸手市）の幸手尋常小学校への辞令

が下りたが、下総は 4 月 11 日付けで休職し、甲師に入学した。こうして『歌ごよみ』で言うところの「正式な勉強」が始まったのである。

4. 二度目の上京・進学という選択

師範学校在学中の 17, 8 歳で音楽の勉強を始めて 20 歳で甲師入学、23 歳で卒業した下総の音楽歴を見ると、当時としては本人が言うほどには「遅まき」ではない。本当に「遅まき」なのは 27 歳から始まった作曲修業ではないだろうか。

実は下総の在学時代には大正 7 年（1918）に鈴木三重吉が主宰する雑誌『赤い鳥』を拠点とする童謡運動が盛り上がりを見せていた。甲師の中でも音楽教員から作曲家に転身して童謡運動に参加する者が出ており、下総の先輩では藤井清水（広島県福山中学校出身、大正 5 年甲師卒）、成田為三（秋田県師範学校出身、大正 6 年甲師卒）、草川信（長野県長野中学校出身、大正 6 年甲師卒）、後輩では黒沢隆朝（秋田県師範学校出身、大正 10 年甲師卒）がいる。彼らの中では、下総と同じく地方の師範学校出身の成田為三（1893-1945）に注目してみよう。

成田は下総より 5 歳年上で明治 26 年（1893）に秋田県北秋田郡米内沢村（現北秋田市）に生まれ、准教員準備場（1 年制）を経て明治 42 年（1909）に秋田県師範学校（現秋田大学教育文化学部）本科第一部に入学し、卒業後は小学校勤務を経て大正 3 年（1914）に甲師に進学する。そして在学中に山田耕筰（1886-1965）に師事し⁽³⁾、代表作となる「浜辺の歌」（林古溪作詞）を作曲していた。成田は大正 6 年（1917）に甲師を卒業し（下総とは入れ違いになる）、佐賀県師範学校（現佐賀大学文化教育学部）に赴任するが、大正 7 年（1918）に「浜辺の歌」がセノオ社から出版されると翌 8 年（1919）には退職して上京する。東京で小学校教員をしながら『赤い鳥』に「かなりや」（西條八十作詞）を発表して同誌の専属作曲家になり、大正 10 年（1921）には鈴木の手

助でドイツ留学に出発し、ブラームスの影響を受けた作曲家ロベルト・カーン(1865-1951)に師事した(浜辺の歌音楽館 1988)。

一方、甲師時代の下総が童謡運動や作曲の勉強に関心をもった形跡は見えない。むしろ演奏を専門にしない甲師の男子学生としては珍しく、学内演奏会に本科生に交じって2回も出演し、好きなオルガンを演奏していたのである。2年のときは大正8年2月25日の学友会第25回土曜演奏会に出演しギルマン作曲「カンツォネッタ」を弾き、3年生のときは7月5日の学友会第26回土曜演奏会に出演しギルマン作曲「諧謔曲」(作品31)を弾いた(東京芸術大学1990:488,497)。趣味の短歌では「白桃」と号して学友会の雑誌『音楽』に四回も投稿するほどであり(2年生のときは大正8年発行の10巻2号と3号。3年生のときは10巻6号と11号。東京芸術大学2003:928-929,931)、在学中は歌日記をつけていた(下総1954:142)。専門の方では音楽に加えて国語の教員免許も取得し⁽⁴⁾、甲師を首席で卒業した。甲師の卒業生には地方校勤務の義務があり、下総の初任校は新潟県長岡女子師範学校(現新潟大学教育学部)であった。上野から十数時間かけてたどり着き、宿直室に床をとってもらったときは侘しくて涙が流れたという(下総1954:65)。当時、東京と地方の音楽教育のレベルの差は大きく、それを縮めるために甲師卒業生の貢献が求められたのであるが、首席卒業の若い教員に地方校勤務は身に応えたであろう。下総は長岡女子師範学校を皮切りに秋田県師範学校、岩手県師範学校、栃木県師範学校と6年間に4校も異動した。しかも長岡から秋田へ北上した後は岩手、栃木と勤務地が東京に近づいている。この時期、下総は音楽人生のリセットを模索していたのではないか。現に大正13年(1924)8月に栃木県師範学校に赴任すると毎週日曜日に信時潔(1887-1965)から作曲のレッスンを受けるため東京に通い始めた。2年半後の昭和2年(1927)3月には退職して上京し、東京で複数の学校で音楽を教えながら時期を待った。そして昭和7年(1932)に文部省在外研究員としてドイツに留学しベルリン高等音楽学校で新古典主義作曲家のパウル・ヒンデミット(1895-1963)に師事した。

成田は地方の師範学校→甲師(最初の上京・進学)→地方校の音楽教員→退職→上京・ドイツ留学(二度目の上京・進学)というルートで音楽教員から作

曲家に転身していった。下総も大筋は成田と同じルートをたどった。ただし作曲家修業を始めたのは成田の方が早かった。成田は甲師在学中から学外の師につき、童謡運動を背景に「浜辺の歌」を書いた。また下総も出演した学友会土曜演奏会において成田は2年在学時の大正5年2月19日の会に混声合唱曲「母よさらば」を発表した(東京芸術大学1990:429)。地方校勤務も2年で見切りをつけて上京し、上京から2年後に留学した。一方、下総は作曲修業を始めたのが地方校勤務5年目と遅かったのも、その翌年には退職して上京し退路を断った。

音楽教員は地方に住む者から見れば価値ある専門職であり、だからこそ小林も下総も上京し、甲師進学を目指した。しかし、甲師に不合格だった小林はともかく、合格した下総が音楽教員に満足できなかった。東京音楽学校の尺度では音楽教員は限定的な専門職だったのであり、実際、甲師の中には成田のように教育システムは未整備だが演奏が本職ではなくても可能な作曲家という専門職を志す先輩がいた。下総は成田よりは遅れて地方校勤務時代に作曲家への転身を図り、その後は成田と同様に教職を捨てて上京し、ドイツ留学へと向かうのである。地方在住の音楽青年にとって二度目の上京・進学とは音楽教員人生との決別であった。

注.

- (1) 下総は甲師の終焉に際して「師範科を送る」という小文を書いている(下総1952,東京芸術大学2003収録)。
- (2) 狩野は中学校卒業後、東京高等師範学校入試までの間、小学校教員をしながら勉強していた(田舎教師研究会1981)。
- (3) 当時、東京音楽学校に作曲科はなく(昭和6年になって本科に作曲部を設置した)、本格的に勉強するならば学外で作曲家の個人レッスンを受ける他はなかった。
- (4) 甲師で音楽と国語の二枚免許を取得できるのは国語の学力を認められた者に限られる(坂本2019)。

参考文献.

- 田舎教師研究会(1981)「狩野益三(作中・加藤郁治)関係資料」『田舎教師研究』5, pp.41-43
岩永眸(1956)『田山花袋研究』東京:白楊社

- 芸術研究振興財団，東京芸術大学百年史編集委員会※
（2003）『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』
第二巻，東京：音楽之友社
- 小林一郎（1969）『増補田山花袋―「田舎教師」モデル日記原文と解説所収』，東京：創研社
- 埼玉県師範学校（1917）『埼玉県師範学校一覧』大正6年度
- 坂本麻実子（2006）『明治中等音楽教員の研究―『田舎教師』とその時代―』東京：風間書房
- 坂本麻実子（2008）「東京音楽学校における唱歌教員養成の終焉―乙種師範科生徒募集中止をめぐって」『富山大学人間発達科学部紀要』2-2，pp.13-18
- 坂本麻実子（2019）「音楽と国語の二枚免許をもつ教員の養成―俳人大須賀乙字の東京音楽学校就任との関連から―」『富山大学人間発達科学部紀要』12-2，pp.35-49
- 下総皖一（1952）「師範科を送る」東京芸術大学 2003 収録，pp.1537-1538
- 下総皖一（1954）『歌ごよみ』（音楽文庫）東京：音楽之友社
- 全国国語国文学会編（1960）『国語国文学研究史大成 13 藤村・花袋』東京：三省堂
- 田山花袋（1986）『田舎教師』岩波文庫，東京：岩波書店
- 竹内洋（2005）『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』増補版，京都：世界思想社
- 東京芸術大学百年史刊行委員会※（1990）『東京芸術大学百年史 演奏会篇』第一巻 東京：音楽之友社
- 中島睦雄（2018）『下総皖一 「野菊」「たなばたさま」などの作曲家』（もっと知りたい埼玉のひと）さいたま：さきたま出版
- 浜辺の歌音楽館（1988）『「浜辺の歌」の成田為三 人と作品』秋田：秋田文化出版社
- 百年史編集委員会（1976）『百年史 埼玉大学教育学部』浦和：百年史刊行会

※印の文献は本文では東京芸術大学と略記する

（2020年10月20日受付）

（2020年12月8日受理）